

「けやき俳句の会」会報(第二百四回)

令和二年九月

第二百二回句会記録

★日時 九月二日

★場所 紙上句会

★参加者十九名 (総数五十七句)

★真樹先生投句 (○内の数字は得票数)

②行合の雲山頂に龍田姫

②定家葛の花齒車のひとつ欠け

また自肅下弦の月の澄み渡る

★真樹先生選句 (◎は特選)

◎⑥茄子貰う挽ぎたての陽の温み

◎⑤稲妻の咆哮の真上安房の国

◎⑤西陣の機織る音や藤袴

◎①チバニアンの不思議を思う竹の春

⑤百選の水も秋なり手で掬う

④原爆忌ピースと書いて折り鶴に

④新蕎麦や多摩の湧き水鼻に抜け

④七夕や笹への願ひしなるほど

③びつしりと朝露付けて草光る

③鳳仙花ひとりに馴れし流る雲

③秋暑の草刈る塩飴と水を持って

③忍ぶれど色濃き恋や酔芙蓉

③たばねみし根が獣めく釣忍

②秋暑かな新型コロナの先見え

②嵯峨菊の歴史紐解く京の街

②朝顔に寝ぼけ眼をのぞかれる

②新型コロナの夏無事に越すこの先は

①生き足りしか夜毎の脱出甲虫

①鯛焼く漁港なつかし国訛り

★会員互選句

⑤悠久の石の便りや流れ星

③魂棚の奥とお喋り長くなり

②原爆忌あの日も市電走りおり

②人唄もすべての昭和遠くなり

②秋茄子は糠漬けが良し亡母も吾も

②命日やかの世も咲きし白芙蓉

②やさしさは言葉の端に秋の草

②旬なのに高値の秋刀魚すかを食う

①戦塵や鴉の速贅蝨めけり

①秋気澄み終の血族弔いぬ

①京の郷別れて迷う道おしえ

①先師の葬遠く聞こえる法師蟬

①コロナ禍の顔白き子ら休暇明け

①秋の蚊の所在なさそう部屋にいる

①大多喜の城址を囲む法師蟬

①手の甲の老斑なで撫で晩夏かな

①老いぼれの帽子にとんぼアクセサリ

①かなかなと鳴く声未来を見透して

①長雨が絶えて張り切る法師蟬

①戦没者追悼記念距離を取り

①今想う八・一五日無の中で

①葦原に親の名呼ぶか行々子

①兜虫腹出す骸累累と(＊冬水)

①写真展案内嬉しき夜の秋

秋雲

一華

蕉哉

蕉哉

真弓

冬水

一華

盈光

夢城

夢城

青嵐

青嵐

冬水

冬水

東洋

東洋

而今

香魚

秋雲

誠

蕉哉

要

藍愛

樹音

【次回開催】

十月七日(水)

自由句三句